



農村RMOと最適土地利用総合対策の先進地視察に行ってきました

農村RMOと最適土地利用総合対策の業務の参考とするため、令和7年1月に富山県立山町釜ヶ淵(かがふち)地区へ先進地視察に行ってきました。

釜ヶ淵地区について

令和3年度から国の補助事業(農山漁村振興交付金)の最適土地利用総合対策、令和4年度から農村RMOモデル形成支援を活用しており、地域の遊休農地を解消し粗放的利用を行っているほか、地域住民全体で地域の活性化に取り組んでいる地域です。
各県からの先進地視察の申込が多い地域で、今回は本県と新潟県が合同で視察し、釜ヶ淵地区の取組を紹介いただき、意見交換を行いました。

令和3年度から最適土地利用総合対策取組を開始

人口減、少子高齢化、農業者の減少が進行している現状において、地域をなんとかしたいとの思いから最適土地利用総合対策に取り組むこととなりました。話し合いの中で「地域に移住者のメンバーを加えてもいいのでは?」との意見があり、県外出身の地域おこし協力隊や移住者が話し合いに参加、その方々の外からの目線で「やってみたいこと」を提案していただくと前向きな意見交換となり、その結果、ポニーの放牧やハーブ栽培(カモミール)などの粗放的利用を開始することとなりました。

令和4年度から農村RMOモデル形成支援事業の取組を開始

地域全体の課題や対策について話し合ったことをさらに発展させ、いろいろな課題解決に取り組みたいとの思いから農村RMOの取組を開始し、「釜ヶ淵みらい協議会」を設立しました。
地域の交流拠点施設である「釜ノ蔵」では、地域おこし協力隊が薬膳カフェを営んでおり、地域の交流イベントも開催されています。
その他、コミュニティーガーデンの設置や市民農園、農家民泊の運営も行っています。

事業実施による効果

○地域の連携・人との繋がり

- ・普段顔を合わせない人が集まり、地域の中で新しい人との繋がりが広がっている。
- ・活動を通して様々な人・団体・企業との協力の輪ができつつある。

○継続した話し合いの場

- ・定期的に集まって、話ができる場が生まれた。
- ・みんなで意見を出し合うことにより内容がより発展している。



視察を終えて

釜ヶ淵みらい協議会の方や、立山町農林課の方、地域おこし協力隊の方から話を聞き、「地域をなんとかしたい」という思いや「地域の暖かさ」を感じました。みなさん気さくでとても親しみやすい方たちばかりでした。話し合いでも否定しない雰囲気を作るよう気を付けているそうです。(納得です！)
地域の課題を解決するには、地域ぐるみでの話し合いがとても重要になってきます。みんなが話しやすい雰囲気を作ることや、日頃から地域住民の間でコミュニケーションを図ることが、より良い地域作りに繋がると感じました。



エッホ エッホ



釜ノ蔵(釜カフェ やわやわや)



栽培したカモミールを使用したハーブティ

● 農村RMOとは・・・

複数の集落にまたがり、農業活動等を通じ地域コミュニティの維持や活性化に取り組む組織のことです。

連携する組織として、農業者の組織する団体、社会福祉協議会、自治会などが考えられます。

● 最適土地利用総合対策とは・・・

地域ぐるみの話し合いによる最適な土地利用構想の策定、鳥獣被害防止対策、粗放的な土地利用を総合的に支援するものです。



ドローンを活用した効率化な農地パトロールの実証調査を行いました

○実証時期:令和6年9月

○実証地: 鮫川村西山婦知女賀(にしやまがちめが)地区

(鮫川村の北部に位置し、農地は山間に囲まれ、水稻が作付されている以外は保安全管理が行われている。ドローン撮影、車両進入が可能な一団地の農地。)

○事前準備

(1)必要機材の準備

撮影用ドローン、心拍数計測器(体力的負担を定量的に表すため)、タブレット

(2)対象農地の地図(飛行ルートを確認するため)

(3)ドローンの飛行許可申請等

「無人航空機の飛行に関する許可・承認申請書」を東京航空局へ提出。

※航空法で規制されていない場所や方法で飛行する場合は不要だが、許可を取っておくことが推奨されている。



○調査方法

(1)飛行ルートの設定

ドローンで撮影した映像と、事前に準備した対象農地の地図と照らし合わせ、一筆ごとに遊休農地に該当するおそれのない農地と該当するおそれのある農地とに区分しながら、遊休農地と思われる農地について、調査内容をタブレットで現地確認アプリを活用して入力した。

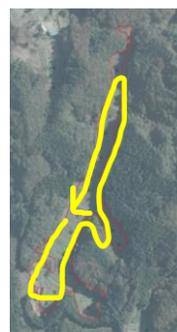
(2)時間の調査

ドローンによる調査と調査用紙による調査(慣行)を比較

なお、ドローンによる調査結果の入力はタブレット、調査用紙による調査結果の入力はパソコンとする。

(3)体力的負担の調査

心拍数計測器にて調査員3名の平均心拍数を10分おきに計測。



黄色が飛行ルート

○調査結果

調査方法	時間	体力的負担	データ入力
ドローン	12分	78.67bpm	アプリを活用し、タブレットにその場で入力。
徒歩	30分	87.33bpm	指定様式に手書きで入力後、事務所でパソコンにデータを入力。
評価	ドローンの方が18分(60%)短縮された。	ドローンの方が8.66bpm(10%)低くなった。	ドローンの方が指定様式に手書きで入力する手間が省けて作業が効率化した。

○まとめ

利用状況調査でのドローンの活用については、操縦者の育成や機械(保険代含む)に係る予算の確保が課題である。一方、ドローンで撮影した動画は農地の栽培、保安全管理、遊休農地の状況が十分確認できた。対象農地の地図と照らし合わせながら確認でき、時間の短縮、体力的負担の軽減、データ入力の効率化等に繋がりが、ドローンの活用は有効である結果となった。

○ドローンを活用した農地パトロールの詳細や、遊休農地解消事例を掲載した「遊休農地等利用調整手法マニュアル」は、農村振興課HPに掲載していますので、参考にしてください。

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36045b/kousakuhoukichi.html>

編集後記

「にじいろだより」第1号が無事に発行され、担当としては一安心しておりますが、読んでいただくみなさまに分かりやすく情報は伝わっているだろうか？見にくくないかな？など、不安は尽きません。試行錯誤しながら、これからもみなさまのお役に立つような情報を届けていきたいと思っておりますので、温かい目で見えていただくと幸いです。よろしくお祈りします 🌈